

CAPD：高齢者の導入

Q5

一人暮らしをしている93歳の母は、腎硬化症による腎不全のために透析が必要と言われて、主治医の先生から腹膜透析(CAPD)を勧められました。高齢、一人暮らしの母でもCAPDはできるのでしょうか。

A5

今や透析開始の平均年齢は66.4歳で、毎年高齢化しています。高齢者を年齢により、前期高齢者(65～74歳)、後期高齢者(75～84歳)、超高齢者(85歳以上)と分けていますが、高齢社会となった最近では、後期高齢者や超高齢者の透析導入が多くなっています。

在宅医療であるCAPDでは、病院への通院回数は月に1～2回ですみます。CAPDは、体外循環のためのシャントが不要であり、心血管系への負担も少なく、“高齢者にやさしい透析療法”として注目されてきています。しかし、親が全面的に支援する小児(約80%がCAPDを選択)と異なり、高齢者では本人が自立できていない場合には、配偶者や子どもなどの家族の支援が不可欠となります。

しかしながら、多くの高齢者は自立しています。特に、一人暮らしをされている高齢者であれば、腹膜透析のバッグ交換やカテーテ

ル出口部のケアは容易にできると思われま。そして、加齢とともに失われていく自立能力に対しては、ご家族の見守りや介護保険を利用した段階的な支援により、高齢の患者さんが住み慣れた自宅で生活することが可能になります。

また、血液透析に比べて尿量が比較的長く保たれるCAPD療法は、水分制限が緩やかで、ほぼ普通の食事が食べられることから、高いQOL(生活の質)が得られる透析療法です。さらに、超高齢者の場合は、腹膜透析液の交換回数や注液量を少なくすることが可能であり、より自然に毎日を過ごすことができます。

高齢者におけるCAPDには、次表のようなメリットとデメリットがありますが、在宅医療であるCAPDを始めるためには、まず、高齢者の持っている能力を信じる必要があります。

(平松 信/岡山済生会総合病院・医師)